

第6回 甲賀市小中学校教育のあり方審議会 議事概要

1. 日 時：令和4年6月7日(火) 14時30分～16時00分

2. 場 所：甲賀市役所4階 教育委員会室

3. 出席者：〔委員7名〕（敬称略）

狩野秀樹、伊藤孝子、中西三夫、山田昭、前川志津子、青木秀樹、
八木正隆

※欠席：池田静香、中野和彦

〔事務局（市）〕

学校教育課 松村参事 松尾課長補佐
教育総務課 田原課長 田中室長補佐

〔傍聴者〕

1名

4. 内容

開会

市民憲章唱和

1. あいさつ

会長

皆さん、こんにちは。昨日の雨もようやくあがりまして、また梅雨のシーズンがやって来きます。先日から埼玉や東北では雹が降ることもありました。そう考えますと滋賀県は、そのような被害は幸運にもなく、台風もそうですし、ありがたいことだと思います。自分の住んでいる地域がありがたい所だと思わせる。これも最近、SDGS が話題で、ここ1、2年でブームになってきましたが、小学生に考えさせる時に持続可能な社会という話では、今あるものの良さを感じ取らせるという点では、先週伺いました土山小学校、土山学区のような物以上に気持ちを残す、気持ちを受け継いでいく。甲賀市の市民憲章にもありますが、この5つのことはまさにこのことを言っているのではないかと思っています。本日は、先週の土山小学校に伺ったことも含めて、委員の皆様の感想やご意見を今日はまとめていきたいと思っています。よろしく申し上げます。

2. 会議の概要報告、議事概要について

事務局

会議の概要報告について、ご説明させていただきます。

資料1をご覧ください。

1. 会議の名称は、第5回 甲賀市小中学校教育のあり方審議会、
2. 開催日時は、令和4年4月26日（火）14：30～15：40、
3. 開催場所は、甲賀市役所4階 教育委員会室です。
4. 議題は、会議の公開について、令和4年度の審議についてです。
5. 公開又は非公開の別は、公開です。
6. 出席者は、委員8名、欠席1名と教育長・事務局職員です。
7. 傍聴者数は、0名です。
8. 会議の資料は、甲賀市附属機関の会議の公開等に関する指針です。
9. 議事の結果概要は、会議の公開について甲賀市附属機関の会議の公開等に関する指針に準じて会議を公開します。令和4年度の審議について、事務局より説明させていただきます、意見交換を行いました。
10. その他は、ございません。

資料2をご覧ください。

- ・第5回甲賀市小中学校教育のあり方審議会 議事概要です。
- ・会議の発言内容を簡略にまとめ、議事の発言内容の記録欄には「委員」のみの表記とさせていただきます。

以上説明とさせていただきます。

3. 今後の教育環境づくりについて意見交換

会長

先日の土山小学校に伺っての感想、ご意見をざくばらんにお話ししていただいてまとめていこうと思います。地域学、土山学に焦点をあててお話いただいても結構ですし、学校の指導体制についての話をしていただいても結構です。自由をお願いします。

委員

土山小学校を参観させていただきまして、児童の方は生き生きと笑顔で楽しそうに授業を受けておられてよかったなあと思いました。特に山内地域、鮎河地域から来られた児童の方を、小学校6年生で参観させていただきましたが、地域の特色やいろいろ調べてきたことを発表されていきました。特に学校の地域が広いものですから、自分の近くの地域の神社など、いろいろ調べたことを頑張って理解してもらおうと説明されていきました。児童が1人、2人の教室では、そういう努力も共感もなかなかしていただけないが、たくさんの児童のなかで説明している授業はどうしたら理解してもらえるか自分なりに考えて発表されていたのが非常に良かったと思いつつ見させていただいていました。

委員

土山小学校、山内小学校、鮎河小学校が統合して一緒になって土山学区になりました。先日は、6年生を参観しましたが、それぞれの自分の住む地域にあるもの、素晴らしさを伝えたいと調べて発表されていました。その中で、今もおっしゃいましたが、例えば鮎河小学校出身の児童は一人でしたが、自分1人で活動するのではなく、今、土山小学校という22人の中で自分の家の近くのこと、自分の誇りに思うことをすごく上手に紹介していましたし、学習の基盤となる人数の大事さを感じました。

それと、子どもたちは自分たちの地域のことを調べて紹介していたのですが、他のご意見にもありましたが、どうしてもインターネットを使って調べる、そのことを上手にタブレットに取り込んで、ICTを使用して学習に生かすことはすごく上手でした。去年から他の小学校で見せていただいた以上に、6年生ということもあり、本当に自分たちで上手に動画を取り入れたりしていましたが、インターネットで調べたことがそのまま文字として出てきて、他の委員さんの意見にもあったのですが、やはり自分の足で歩いて人に出会ってという学習も、もっと3年4年でしているとは思うのですけれど、大事ではないかなと感じました。

会長

ありがとうございます。現在の土山小学校では鮎河小学校から来た子供は、統合して一緒にいるクラスの子どもたちの中で鮎河の良さを話すことができ、他の子どもたちに聞いてもらえることは、やっぱり励みになるということですね。

委員

私は日野町の小学校出身なのですが、私が通学していた小学校では、以前は本校と分校があり、3年生までは分校と本校に分かれていて、4年生で一緒になります。僕は本校にいましたが、分校から人が来て68名ほどになり、2クラスに分かれます。一緒になったときはみんなうれしいと思います。今まで1クラスでやっていたものが2クラスになって、新しい友達が増えることは非常に良いことだと思います。人が集まってくる、友達が増える、学べる、競争相手ができる。現在の土山小学校は、いくつかの学校が集まって学習ができる環境が作られたことは非常に良いことだと思います。

会長

土山小学校の校長先生の話では、鮎河地域のことを発表していた子が、「今度、鮎河の山にみんなを招待したい」と話していたとおっしゃっておられました。その子は、やはり使命感があるんですね。いかにクラスの子どもたちに鮎河の良さを分かってもらおう努力をしようという姿があると思います。

それから良かったのは、土山小学校となって鮎河地域も山内地域も校区であると捉えるように学校行事等を取り入れているということですね。鮎河や山内の川等に行くということで土山小学校区であると子どもらが意識するように学校が取り組んでおられる。そういうところの指導体制はやっぱりものすごく大事だと思います。校区が広がったといっても、子どもたちが戸惑うこともなかったのが良かったかなと思います。

委員

気になっていたのは校区が広がって学習の環境、いろんな教材のフィールドが広がるので、いろんな取り組み、教材にするのはしやすいと思います。その代わりにその現地へ行くのに時間がかかり、遠距離になるのではないかと考えていました。しかし、うまく鮎河、山内地域へ行きながら、それぞれの地域の特色を活かし取り入れながら取り組んでおられると感じました。

子どもたちの意識はどんなのかなあと思いました。まだ僕は土山や！私は鮎河や！私は山内や！という意識を当然持っていると思うのですが、意識を持ちながら今は土山小学校だと捉えていますか。

委員

いろんな行事を土山っ子という意識で教育をし行事をされていたので、土山っ子という意識が根付いているのではないかと考えています。

会長

土山小学校に統合して何年になりますか？

事務局

平成 29 年度、平成 30 年度に閉校になりました。統合して 4 年、5 年です。

会長

校歌がまだ土山小学校のままです。そのあたりはどうなのだろうと。校長先生が弾き語りをしていただいたのですが、土山、鮎河、山内が入った校歌がありました。校歌を変えると子どもたちももっと意識ができるのではないかと考えています。

委員

参加させていただけなかったのですが、コミュニティスクール、地域ボランティアを意識されて学校が発信されているのでホームページも活気があるという印象を持たせていただきました。

その中で地域学、土山学。ふるさと学習というと故郷への思い、愛着、愛校心などの情操を豊かにする面が強いと思います。地域学は、地域課題に目が向く姿勢ではないかと思いました。

この間、植樹祭があったときに感動した言葉があり、その言葉は、『漁民の森』という言葉でした。漁民の森とは何かと言いますと、海が豊かになるためには山に広葉樹があって川が流れて行ってそこまで見ていないと海は豊かにならない。だから、植樹をするという話でした。それと同じように地域学も自分たちの地域がどこにつながっていて、どういう課題があるかまで見えてくる。持続可能な学習の姿が見えてくる。

ふるさと学習から地域学というイメージで取り組んで行かれると良いと植樹祭の言葉から地域学について思いました。

課題の中で、コミュニティスクールと地域学校協働活動についてお話が出ると思いますが、コーディネーターの難しさ、現地になかなか行けないことを言われていました。私の地域でも話していますが、まちづくりセンターや地域づくり協議会がどのように関わるか話題に出ていたのもまたご紹介できたらと思います。

会長

いろんな学校でふるさと学習やびわこ学習をやっていますが、これだけ地域の方のご協力を得て、いろんな成果物、例えばお茶のパックのパッケージを作ったり、それを平和堂に置かせてもらうとか、いろんな方が関わっていただいているということ、関わっている方と児童をつなげるのにコミュニティスクールの皆さんがいる。これもよく頑張っておられると思いました。わずか10人近くであると思いますが、土山小学校が滋賀県内でも優秀な取り組みであると思いました。勉強して調べて分かりましたというところはたくさんあると思いますが、ではどうしようかと行動ができていく地域学習ということがものすごく良いなあと私は思いました。そのことにより子どもが気づく。校長先生がコロナ禍で土山の宿場まつりが2年ほどないとおっしゃっていました。私は、もっと宿場まつりをやってもらって、校長先生が土山を語る子を増やすのではなく、土山を語りたい子を増やしたいとおっしゃっていたことが大事なことでみんなの思いとしてはものすごく良いことだと思いました。

プログラム体験のお茶の体験で実際に子どもたちがお茶を作っているということも紹介いただいたのですが、地元の人と協力するということがすごいと感じました。1年生から活動を続けていって、6年生で良いところや課題が見えてきたりして、子どもたちがどうしていったらよいか、例えば先程の鮎河の子が鮎河の山に来てほしい。そのためにはどうやったら来てもらえるかなあと考えることがすごく印象に残っています。

ICTの活用では、調べて学習が終わってしまうような部分があります。読めない漢字などがあると思いますが、子ども向けのYAHOOきっずなど、利用するのもよいと思います。担任の先生は紹介されませんでした。ICTの活用で良いところは、教室で発表をしますが、タブレットを家に持って帰ると家の人にもその内容を見てもらえるということが今のICTの違いだと思います。昔は、学校参観日に発表したりしましたが、タブレットを持っていけば自分の学習の成果を保護者や地域の人に見てもらえる。自分の今までの頑張りを評価してもらえることはものすごくICTの良い効果だと思います。

委員

コミュニティスクールで今までからも地域の方は、学校の支援者として協力してくださっています。例えば平和堂やインターチェンジなど学校から発信するとき地域の方が工夫しながら、提供してくださったり、実行するための協力を学校だけではなかなかできないので、コミュニティスクールの協議をする中でたくさんの協力を得られて、特に発信の面で今までにない広がりや協力を得られているなあと感じました。

会長

子どもたちがこんなことを勉強しましたというより、自分たちで物を作ってこんな物を

売りたいですということをごとてやってもらったらいのか。子どもと協力先をつなぐ人が必ずいる。このコミュニティスクールの役割は、他の地域とは違うところかもしれない。大抵の場合、コミュニティスクールが繋いで終わりになりますが、コミュニティスクールが繋いで子どもたちが段取りをして、次にこの人に頼みにいけば、この人がしゃべってくれるし、そこでできるからという土山小学校のコミュニティスクールの懸け橋の部分がすごく良かったと思います

委員

人数の少ないところの子どもたちが1ヶ所に集まって社会を広げることは、良いことだと思う。子育て世代の親は反対と伺った。年配の方は、子どもにとって集団でいっぱい集まって競争して、勉強して賑やかにやったほう良い。子どもたちも一緒だと思います。子育て世代は、子どもが近くにいる自分で帰ってくる。楽である。送迎が必要。バスでいかないといけない。何かあれば迎えに行かないといけない。距離と手間がかかると子育て世代の若い方には抵抗を感じる。子どもたちのためには社会を広げてあげることが非常に良いことで大事だと思います。

会長

子どもたちが学んでいることの本当の良さをいかに周りの者が共感、共有できるかというところの体制が問われることかなあとと思います。

タブレットで自分の子どもはこう思っている、こんなことを感じているのかということが分かりますが、隣のおじさんには分からない。隣のおじさんや地域の方も、鮎河、山内の子どもが土山小学校に行って良かったなあ、私たちの地域のこと大事にしてくれているという発信を土山小学校がやっている。地域と一緒に連携協力することは大事だと思います。

土山小学校のコミュニティスクールがこれからずっと輪が広がっていくにはどういうことが大事でしょうか。

委員

コミュニティスクールでコーディネーターの役割は、非常に大きいと思います。

学校で言えば、校長先生が変わると学校が変わるといのはよくあります。それをうまく引き継いでいくためには、コミュニティスクールのコーディネーターと「21世紀の土っ子を育てる推進委員会」や「土っ子の安心と安全を見守る推進委員会」のメンバーの方が土山小学校区、鮎河小学校区、山内小学校区から組織されているものと思いますが、教育に熱心な方々が委員会に入っておられるので、そういう方々がしばらく5～10年間ぐらひは、続いて行くと思います。そのあと後継者を委員会の中でうまく作っていけるかが重要だと思います。自分たちがいる間は自分たちで頑張るが、その間にうまく後継者へ引き継ぐことで今後のコミュニティスクールを続けていくうえで大事なことでと思います。

会長

学校でも6年生の演技を5年生が見ていたら、6年生になったらああいう演技が来年で

きると思うようになる。そういう思いこそが伝統につながると思います。

土山小学校の6年生がお茶のパッケージを作っていれば、5年生が来年は自分たちがお茶のパッケージを作ることをやってみたいという気持ちにさせることが伝統の始まりになると思います。その取り組みを支えるものが今までは、ほとんど学校だけでやっていました。学校だけでやっていると、どうしても校長先生が変わったり、6年生の担任の先生が変わったりするといつの間にかその取り組みがなくなってしまうこともあります。土山小学校のコミュニティスクールの存在は、すごく良かったと思いました。統合したことにより何とか山内小学校、鮎河小学校の良さも残しておかないといけないという気持ちもありながら、コミュニティスクールに取り組んでいただいた。土山小学校だけのコミュニティスクールならそこまでの熱意はなかったかもしれません。統合することも大変ですが、統合することによって、生まれてくること、気づくこと、ついてくる力もたくさんあるのではないかと思います。〇〇委員、統合して子どもたちは力を付けるものですか。

委員

子どもたちは、変化に強い、順応しやすいというのは経験上思います。統合については子どもたちを心配しているという大人の声はありますが、子どもたちは、それ以上に順応力があると感じています。

コミュニティスクールですが、文科省も義務化の方向になりました。私のいる地域でも40の小中学校をコミュニティスクールに指定して10年が経過しました。滋賀県のコミュニティスクールのアドバイザーと話す機会があり、10年経過すると各学校で格差が出てきます。校長先生が1人で個人商店的にすごく頑張って1人で切り盛りしていくとなると、どうしても続かない。土山小学校は、そういう意味で地域としてコーディネーターを持たれるのはこれからの形ではないかと思っています。文科省の資料を見ますと、学校運営委員会の委員の方は、プランナーであり課題を話してどうしていこうかを考えます。地域づくりの協議会やまちづくりセンターにコーディネーターがいて、学校と地域の調整をします。学校の中ですべてをやるのは大変なので、学校も動きますが、地域同士のネットワークを結んで動くということを文科省は想定しています。

コミュニティスクールによって、学校を支援してくれるボランティアが気軽に来てもらえる雰囲気はありますが、単に学校支援組織と思ってしまう発想は良くないという話があります。土山小学校のように発信、地域にどう役立てて関わるのかというところが大事であり、これからの姿だと思っています。

会長

〇〇委員のおられる地域で40のコミュニティスクールがありますが、コミュニティスクールがうまく続いているところは、どのような特色がありますか。

委員

ボランティアを網羅しない。だれもかれもが来てくださいではなく、例えば、湖南省岩根小学校は生徒指導に課題があって何とかしたいという中でコミュニティスクールができました。私たちの学校にはこの課題・弱点があるから、その課題解決のためにコミュニ

ティスクールに入ってほしいという思いが強いところほど長続きしている。学校を支援してくれるボランティアが気軽に何でも来てもらえる組織では、続かない。

会長

例えば、土山小学校は、子どもたちの思いや子どもたちがこんなことができるようになるということをコミュニティスクールのボランティアの方に分かってもらって、学校の支援をいただいていると思います。学校が進めようと思っている学校の教育方針を十分理解してもらい、土山学の地域学習を取り入れることによって土山の子どもを大好きになろう、人を大事にしようということで、それなら地域の方も手伝おうということになっていると思います。本当に口で言うのは簡単ですが、いろんな方がいろんな意見を持ったまま学校へ来ていただくとなかなかまとめるのが大変なこともあります。

委員

学校支援については、以前はこの教科のこの部分をお手伝いお願いしますとか、田んぼであったり、教科であったり、総合的な学習の部分でお願いしていたところもあったと思います。コミュニティスクールの中では、学校として何がしたいか、どんな思いでいるかを理解していただいて来てくださっているというところが違うところだと思います。本当の意味を何回も会議をして、土山小学校では地域へコミュニティスクールだよりを発行して、地域へ学校の本当の思い、願いを浸透させて、それからまた学校から発信していく。また、地域に支援してもらおう。そのあたりが今までの学校支援とは違うと思いました。

会長

学校がこんな思いを持って子どもたちを育てているということを上手に発信すれば、関係する方が集まって来て下さる。滋賀県内でも、土山小学校のようにしっかりと学校の思いを持って伝えている。コミュニティスクールだよりを発行されている。私は、校長先生にホームページも子どもたちはこんな思いで学習していますとか、こんな気付きがありましたということをタイムリーに載せたらもっと共感してもらえる人がいるということをお伝えしました。学校が願っている子どもの育て方、子どもの目指す子ども像をしっかりと地域に伝えていることも大きな違いかなあとと思います。

現在、コミュニティスクールのメンバーの中にどちらかという若い方が入っておられないので、次のコミュニティスクールのメンバーをどういう方にしてもらおうかということを考えるためにも大事なかなあとと思います。

土山小学校の校長先生は、土山の宿場まつりを復活させてほしいとおっしゃっていました。土山の宿場まつりのスタッフに30歳代ぐらいの若い方がいて、その方がコミュニティスクールのメンバーに入ってもらえると変わってくると思います。

委員

学区民の委員の方で有識者としてコミュニティスクールのメンバーに入って来られる方の中には、固定観念がありすぎるということで、その方の持つおられるネットワークがどんなものか、後継者として入っていただくことでどんな活動をしていただけるか、そ

のあたりまで見ていかないと従来の有識者として入っていただいても現在のコミュニティスクールの中ではなかなか大変というところもあります。発想を変えていくことも大事ではないかと思います。

会長

土山小学校の6年生が作ったお茶のパッケージを販売するというところに意味があると思います。お茶のパッケージが売れないのも大事な経験です。次に売れるにはどうしたら良いかを店舗の方等と一緒に考えたりする。ここに力を注ぐ子どもたちのエネルギーは、社会人になるために役に立つのではないかと思います。土山小学校は、コミュニティスクールのメンバーにいろんな世代の人が入ってくる良い見本だと思います。

昨年度、多羅尾小学校に伺いましたが、学習においてある程度の人数の中で学習するという事について思っておられることはありますか。

委員

1人ではできないこと。20人集まれば、野球ができる。10人であればドッチボールやバスケットボールができる。1人では、体育の授業は難しいと思います。できることが少ないと思います。勉強は、先生に教えてもらえばできるかもしれません。合唱をしたり、絵を描いて隣の子が何を描いているのかを見ることは1人ではできないと思います。人数がいるということ、仲間がいるということは、いろんな考え方を持っている子どもがいることを感じられて良いのではないかと思います。社会に出たら、競争していく。ある程度の人数の中で競い合いや仲間づくりがあり、友達づくりもあるのが良いと思います。

委員

子どもたちには、ある程度の人数がいないと比較もできないし、自分が他の人を見て他の人から学ぶという方法、本から学ぶ、先生から学ぶ、隣の人から学ぶ。三人寄れば、必ず師がいる。友達の中に必ず先生（師）になる人がある。全部ではないけれども、その部分については、彼が先生になれる。音楽にしても何にしてもいっぱいあると思います。そこから、こうした方が良いとか、この子に頼んだほうがうまくいくとかいろんな方法を学ぶことが社会学であると思います。1人では社会学は学べないと思います。

会長

人数が減ってしまったために、いろんな形で自分の意見を他の人と比べたり、自分の考えを評価してもらって他の人がいるということをもう少し考えておく必要がありますね。でもやっぱり横に人がいるのといないのとでは違うというのは決定的な部分ではありますが、その部分も大事なかなと思います。いろいろとお話を聞いている中で、教育環境を作っていくうえで内容と方法というのがどうしても関係してくると思います。土山学、地域学習の内容は、自分の住んでいる所のことを知る、愛着であり、これからの自分たちの住んでいるところに展望を持つ点ではものすごく大事で、それを自分一人でやるのではなく仲間とやる、また地域の人と一緒にやることでもものすごく良い内容でした。でも、土山学をやっていくうえで学校が直接かけあうことがなかなか難しい部分はコミュニティス

クールのお力添えを得てやっていく方法が何より望ましいという話もありました。

ただ、コミュニティスクールの後継者をどれくらいの人にどれくらい増やしていくということを今後考えていかれると思うのですが、誰でも良いというわけではなく学校の教育方針にご理解をいただける人をもとにこういう方を募っていくということも大変大事なかなという話もあったかと思います。

タブレットを多くの学校で使っていますが、子どもたちがタブレットを持つようになってから1年経っていないですが、いろいろな使い方がありますが、ICTに使われている子どもたちにならないようにICTがツールとして使えるためにもこれから大事にしていけないといけないですね。

今日話題に出ませんでしたけれども、土山小学校の6年生が来年中学校に行ったらどうなるのか。小中連携この後にやっていただく甲賀市の小中連携、一貫教育というところに関わってくると思います。

4. 甲賀市の小中連携・一貫教育の取り組みについて

事務局

改めましてこんにちは。甲賀市教育委員会学校教育課の松尾と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

教育委員会にきて3年目になります。元々中学校籍で数学を教えていました。

昨年度、甲賀市の小中連携一貫の教育推進事業に携わっておりましたので、今年度、昨年度の取り組みのことについて説明させていただきたいと思います。座らせていただきます。

本日紹介させていただきますのは昨年度の甲賀市の小中一貫教育推進事業について、昨年度の先進地研修ということで高島市に訪問させていただきまして、高島市教育委員会から高島市の小中一貫教育推進教育の説明と高島学園の見学をさせていただきましたので紹介させていただきます。

まず、本市の本事業の狙いは、甲賀市の教育方針に書かれております『たくましい心身と郷土への誇りをもち、未来を切り拓く人を育てる』という方針がございます。この方針を達成するための手段の一つとして小中連携一貫教育を推進していこうと考えております。目標は、義務教育9年間を通して児童生徒の学びと支援を円滑に接続させることで、学力向上、不登校の問題等の本質的な児童生徒指導上の課題解決を目指して取り組んでおります。

小中連携教育と小中一貫教育は、文部科学省が定義しております言葉を書いています。

小中連携教育は、『小・中学校が互いに情報交換や交流を行うことを通じて、小学校教育から中学校教育への円滑な接続を目指す様々な教育』です。

小中一貫教育は、『小中連携教育の内、小・中学校が目指す子ども像を共有し、9年間を通じた教育課程を編成し、系統的な教育を目指す教育』です。

小中連携教育のキーワードは、『情報交換』、『交流』と『接続』です。

『情報交換』は教職員の情報交換、小学校でどういう様子であったのか、中学校でこういう様子である。小学校が中学校と『交流』すること。小学校6年生から中学校に上がる

ときの『接続』、そこに重きを置く形になってくると思っております。

小中一貫教育の『共有』は、小学校は6年間、中学校は3年間ですが、小学校で6年間だけ見るのではなくて、中学校の3年をプラスして9年間で共有しどんな子どもに育てほしいか、そういったところを『共有』します。

そして、一貫した教育、『共通』、『連続』した指導、『系統』で必ず教科のつながりがございます。

例えば算数、数学では小学校の5年生、6年生で比例、反比例を学びます。それが中学校では文字を使って、1次関数、2次関数につながっていきます。小学校の職員もどのようにつながっていくかということを知って、中学校の我々教員も、どこまで習っているかを確認しながら系統的な教育を目指すというイメージを持っています。

今年度の小中一貫教育推進事業の組織図は、事務局会議が一番上にございます。6名で学校教育課の次長と課長、他担当3名、あと共同実施推進員で毎週水曜日1回貴生川小学校の事務職員の方が来られています。その方も入っていただいて事務局会議を学期に1回程度会議をもっております。

そして、小中一貫教育推進会議が、先ほどの学校教育課と、甲賀市は6つの中学校がありますのでその代表の校長先生、今年度からは各ブロックの小中連携代表の教諭の先生で組織しています。

その他に共同実施推進員の事務職員、人権推進課の方を一名招いて、月1回情報交換、各中学校区の小中連携教育の取り組み状況について情報交換をしております。そして、お互いに情報交換しながら、甲賀市全体の方向性を決めて各中学校区で実際実践していただくという流れになっております。

続きまして、この事業の取り組みの視点は3つあります。

1つは学習についてです。目標は「分かった」「できた」と実感出来る授業づくり。取り組み事項は、授業力の向上、教職員の指導法の工夫や改善、ICTの活用。1人1台タブレットが導入されたことによって、小学校から中学校でスムーズに連携できるような取り組みも各中学校区の方で行っております。こういった指導法の工夫、改善をすることで児童生徒が『分かった』、『できた』と実感できる授業づくりを図ります。

もちろん学力、全国学力・学習状況調査などのテストの結果も大事なのですが、授業中に「分かった」、「できた」というような子どもたちの達成感、「楽しい」と思える授業づくりを目指して取り組んでおります。

例として事業研究会の実施で小学校や中学校で行って、それぞれの教職員がお互いの授業を見たりしています。昨年、一昨年はコロナで授業研究会の実施が機能していない中学校区もありました。また、小中教員の協力授業で小学校と中学校の職員が例えば理科の授業の指導案を一緒に考え、中学校、小学校で授業をしています。

また、家庭学習の定着では、6つの中学校区で家庭学習の方法について、小学校ではこのようにしていきましょう、中学校はこのようにしていきましょうという9年間の見通し、しおりを作成している中学校区もあります。9年間一貫して家庭学習の定着を図る取り組みをしております。

2つ目の視点は、生徒指導の面です。安心して過ごせる居場所づくりです。

甲賀市でも不登校の数も多い状況です。中一ギャップをなくすためにも安心して過ごせ

る居場所づくりの取り組みとして一貫性・系統性のある指導を展開することで、学習規律の維持や児童生徒が安心して過ごせる居場所づくりを図ります。

主な取り組みは、生徒指導部会を各学校で行っています。教育相談部会は、小中学校で連携して情報交換しながら行っています。同学年担任者会は、小学校で行っています。例えば5年生であれば5年生の中学校区の小学校の先生が集まって、行事等について会議していることもございます。

また、授業参観で小学校の職員が中学校に行ったり、中学校の職員が小学校に指導に行ったりすることもあります。

特に体験入学時に小学校から中学校に行くことで中学校の雰囲気分かって、中一ギャップの解消にもつながっていますし、中学校の職員が小学校で授業をすることで専門的な指導を行い、小学生が中学校に行ったときに、見たことのある先生がいることで安心が持てるような機会を作っております。

取り組みの視点3として交流ですが、児童生徒が多様な教職員、児童生徒と関わる機会を増やすことで小中学校の学習・生活の円滑な接続を図ることで、先程の生徒指導と重なる部分はありますが、体験入学の実施で全ての小学6年生が中学校に行っております。コロナの関係で実施できていないところもあります。

小学校同士が交流する、小学校同士で一緒に何か行事に参加する等を行っています。

その他として各中学校区によって課題は様々です。

昨年度は、各中学校区で一点突破、重点目標を決め取り組んでいます。水口中学校であれば、学力向上を目標にしています。甲賀中学校は、「分かった」「できた」の実感できる授業づくり、各教科のスムーズな接続。甲南中学校では、不登校生徒がいるので不登校生徒を減らそうと、小中教育相談の効果的な連携をしながら取り組むなど各中学校区で決めて取り組みました。

今年度の取り組みは、各中学校区で、コロナのことも心配されますので、オンラインでの会議と対面の会議を使い分け、教職員のつながりを大切にしていく。教職員のつながりは小学校、中学校共にしていくということはとても大切なことだと思っています。

2つ目は各小中学校の小中連携担当者が、他のブロックの取り組み状況について情報交換する機会を作っていきます。甲賀市内27小中学校の実際の現場で働いている先生方をお招きして、ほかのブロックがどういう取り組みをしているかなどの情報交換をして今後より良い活動ができるように機会を作っていこうと考えております。

続きまして、高島市の小中一貫教育について説明させていただきます。説明を聞いてきましたが他市ということで十分な説明ができないかもしれませんがよろしくおねがいたします。

高島市の小中一貫教育の目標は『豊かな人間性、確かな学力、たくましい心身』を強調しています。特長は、現行の6・3制に基づいた中学校区ごとの特色ある教育。小学校6年、中学校3年の現行学校制度上の実施。

また、高島市の方でも中学校区が4～5学校区あり、中学校区ごとの状況に応じた小中一貫教育を展開している。

2つ目として標準カリキュラムを活用した教育で、区分を前期4年、中期3年、後期2年として、各区分での発達段階、学びの段階、指導の方向性を明確化、道しるべを作って

います。

各カリキュラムの概要、各区分での目標、指導の重点を明記したものを作成していました。

例えば、算数数学科カリキュラム概要では、就学前の目標、小学校1年生から4年生の前期の目標、小学校5年生から中学校1年生の中期の目標、中学校2、3年生の後期の目標が到達目標と指導の重点について整理されています。これが各教科3年計画で昨年度すべての教科で完成したと聞いております。

現状の学校施設を利用した教育については、高島市は、甲賀市と同じ施設分離型となっており、マキノ中、今津中、朽木中、安曇川中、湖西中学校区で分かれています。公開授業で今津に行きましたが、小学校と中学校が道路を挟んで廊下がつながっていました。雨が降ってもそのまま廊下でいけましたので施設隣接型に近いと思います。

実際訪問させてもらった高島市の高島学園は施設隣接型で小学校と中学校の学校施設が隣接していて小学校、中学校の交流の中で一体的な学園として教育活動を行っておられます。

高島市のプログラムの実践で、大きな3つの取り組みをされていました。小中学校の教員のつながり、教科の横断的なつながりを大切にしておられます。

小学校の教科担任制は、小学校の高学年で専科指導をしています。甲賀市でも貴生川小学で教科担任制を行っており、学びと指導のつながりと小学校と中学校教員とのつながりを大切にしておられます。学びの学習環境づくりでは、子ども同士のつながりを大切にされています。

高島市は、小中一貫推進委員会があり、その中で総括する校長先生やコーディネーターの教諭の先生がいて、連携をされています。

また、研究部会では主に3つの課題について取り組んでおられます。

高島学園は中学校、小学校、真ん中に体育館や職員室があります。学校施設が隣り合っていますので、小学生と中学生の交流の中で中学生による読み聞かせをしたり、中学生が小学生に九九を教えてあげる。中学生が学習ボランティアで、中休みや昼休みに中学生が小学生に学習を教えに行く。家庭学習で行った自主学習を小学生に紹介する。9・6交流（9年生が中学3年生）を小学生6年生が中学生に上がるときに行っておられます。

こういった取り組みをすることで特に中学生にとっては何かを教えてあげるということで、自己存在感、自己有用感、『やった』、『できた』、自分は人のために役に立つという感情が芽生える。交流を持つことで、コミュニケーションを通して中学生の生き方の視野が広がったり、実際に高島学園ができてから不登校児童の数が減少したという説明がありました。

高島学園では、学び改善部会、子どもふれあい部会、子ども支援部会の3つの部会に職員がどこかの部会に所属して、取り組みを進めておられます。

学び改善部会は、生徒指導の補完機能で県の方で、自己有用感や自己肯定感を得る機会を作る、自己決定、共感的な学び。生徒指導の機能を生かした授業づくりやICTを活用した授業を行うこと等。計画を立て実施する。子ども支援部会は、児童生徒の観察、個別支援計画でどんな支援が必要なのかということを小学校、中学校が情報共有する取り組みがされています。

このような取り組みをすることで教職員の指導力向上、一貫した指導ができ、特に強調されていたのは小学校の先生にとっては、中学校の生徒指導がすごくためになったと言われていました。

最後に、高島学園へ訪問した参加者の感想は、中学生のボランティアが多様に実施されていて、それらが小学校、中学校の教育にとって好影響を与えている。常に学校施設が隣接しているので小学校、中学校の教職員が連携することができ、子どもたちの学び方、指導方法についてしっかりと共有することができる。

また、高島学園では、小学生でも中学生でも利用できる特別支援教室があり、何か困ったことがあったらこの部屋に行って部屋を使用できるようになっています。子どもたちもしんどくなったらこの部屋に行って、中学生もお世話になった小学校の先生に会うことができるとおっしゃっていました。

職員会議も、小学校中学校で合同職員会議を開いて情報共有ができます。高島学園では、良い感想ばかり伺ってききましたが、高島学園の校長先生がおっしゃっていたのは、デメリットは、人間関係が一緒ですので、もし何か人間関係でつまづいてしまったら、その修復が難しいケースも中にはあるとおっしゃっていました。数字的にいえば、学力の方でも不登校の減少についても良い効果のほうが大きいとおっしゃっていました

私からの説明は、以上となります。ありがとうございました。

会長

事務局の説明について何かご質問はありますか。

次回、宇治黄檗学園に行きますので、宇治黄檗学園ではどうなっているのか、高島学園はどうだったのかなど見えてくるところもあると思います。高島学園の合同職員会議のような会議は、宇治黄檗学園でもやっているのか。教科担任制は、基本6年生だけですが、宇治黄檗学園ではそれはどうなっているのか次回見ていただければと思います。

委員

私も、平成26年から義務教育学校の2つの事務局をしてきましたし、その他、高島市教育委員会の担当者ずっと情報交換しています。

小中一貫は非常にバラ色のような感じもあるのですが、非常に先行している東京、広島、京都、奈良、メリットデメリット、何年か経つと比較できる部分もありますのでその辺も両面を見ていく必要があるかなと思います。

次回宇治黄檗学園に行けませんが小さな花背、小さな大原、御池、開成、5つ6つ行って見させていただきました。

甲賀市の課題に合うところ、甲賀市がこうだからこういう小中一貫のイメージを持っているというのが大事だと思います。行くとすべてが良いように見えてしまうので、そこは冷静な目が必要かなと思います。長所もあれば短所もあります。

それからもう一点、甲賀市が小中一貫に取り組んでおられますが、小中一貫と学校適正配置がつながってってしまうのではないかというイメージを地域の方がもたれる。

これだけ地域でそれぞれしておられる、そういうことも想定されてということですね。そういうプランを出しておられてやっておられることですから、うちだけ、ある小学校

と中学校だけが小中一貫になって取り残されるところはないだろうか、だとか全部入って行ってしまふのだろうか、というような素朴な疑問を持たれるということですね。

そういう想定も必要かなと思います。

会長

その辺も 8 月の時に視察に行った後にいろいろと協議していこうと思います。

委員

適正配置と小中一貫をセットでというような見方をされる方がいるようですし、適正配置のための統合に厳しい目があるということもあります。

事務局

次回の会議は、8 月 9 日火曜日 14 時 30 分から 16 時 00 分で教育委員会室の予定です。

5. 閉会あいさつ

副会長

本日は、先日の土山小学校の視察も踏まえながら土山学区や ICT の活用、コミュニティスクールとしての土山小学校の状況についていろいろと意見を出し合えたと思います。

私は今週日曜討論を見たのですけれども、その中で『コロナ禍からの復活へ新たな観光・旅のカタチは』というテーマで、作家で写真家の詩歩さんが伝えておられたのは、世界や日本を旅して地域に出かけると地域の方に地域の魅力を訊いたときに『うち、何もないやん』と答える方がたくさんおられるということでした。

詩歩さんが言われたことで私が印象に残っているのが、地域の魅力は本当にたくさんあって、それに気付いてほしいということ。それがこれからの日本に必要なことなのではないかと言われていて、ちょうど土山小学校のこの土山の授業を見せていただいたことに結びついたのですが、まさにその地域を愛するとか、故郷を誇りに思う気持ちを小学校、中学校の義務教育段階でしっかりと育てていくこと、そうした授業を仕組んでいくことは、本当に大切なことです。それが地域を愛する気持ちにつながっていく、根っこの部分になるのかなと思いました。

今度 7 月は小中一貫校の視察で、例えば地域学であったりとか、カリキュラムの工夫であったりとかそういったものも含めながら、どんな風に小中一貫校として教科担任制に取り組みだしたりとか、学校の教育環境を作られておられるのかということなども、また更に知識を深めて行けたらなあと思います。本日は会議に出席いただきどうもありがとうございました。